

2 研究の実際 > (3) ピア・メディエーションに関する活動プログラム

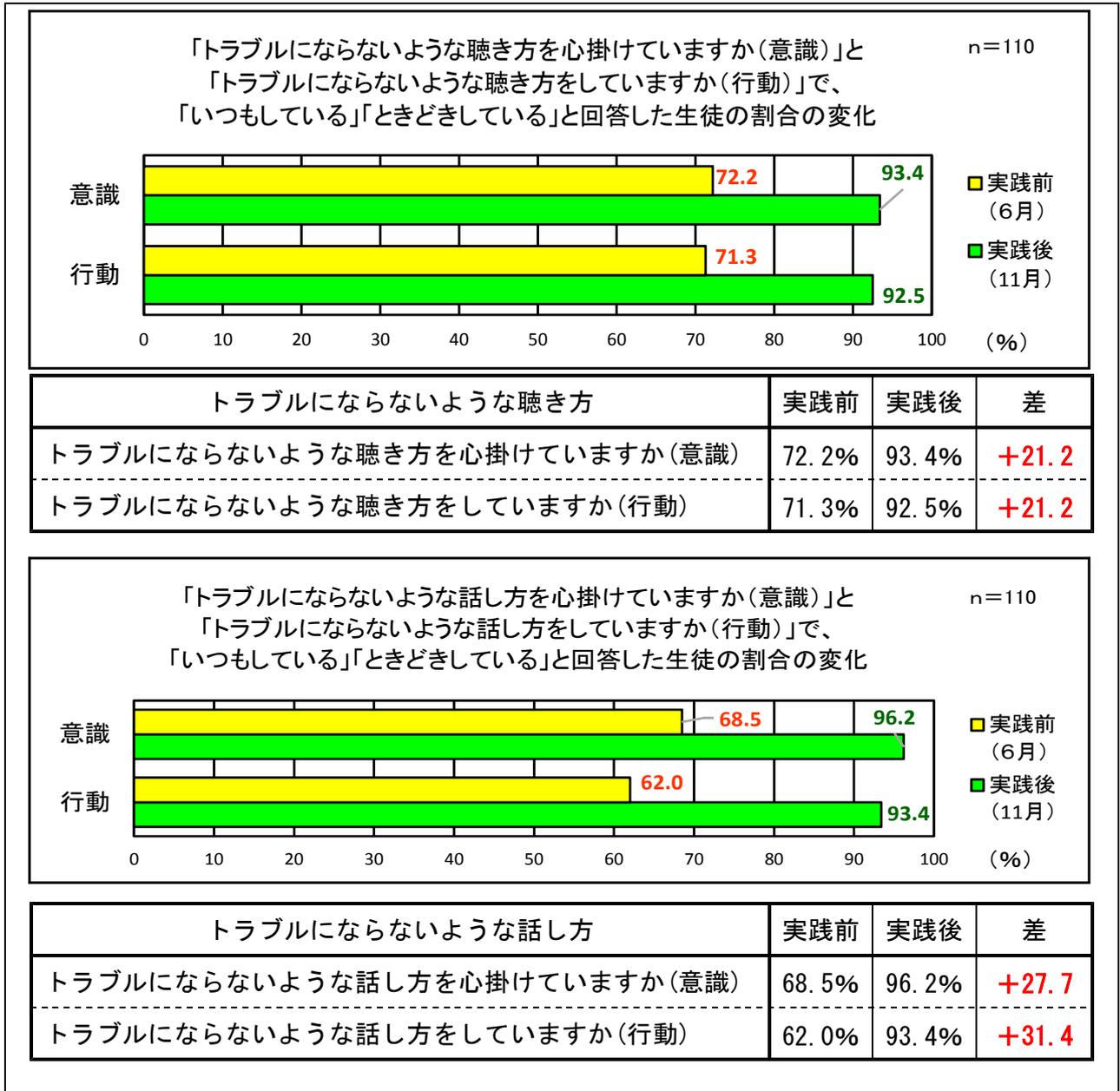
**オ 活動プログラムの検証**

(ウ) 検証結果<中学校>

【検証の視点Ⅰ】トラブル未然防止に効果があったか

a トラブルにならないような聞き方や話し方についての生徒の意識と行動の変化

(「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より)



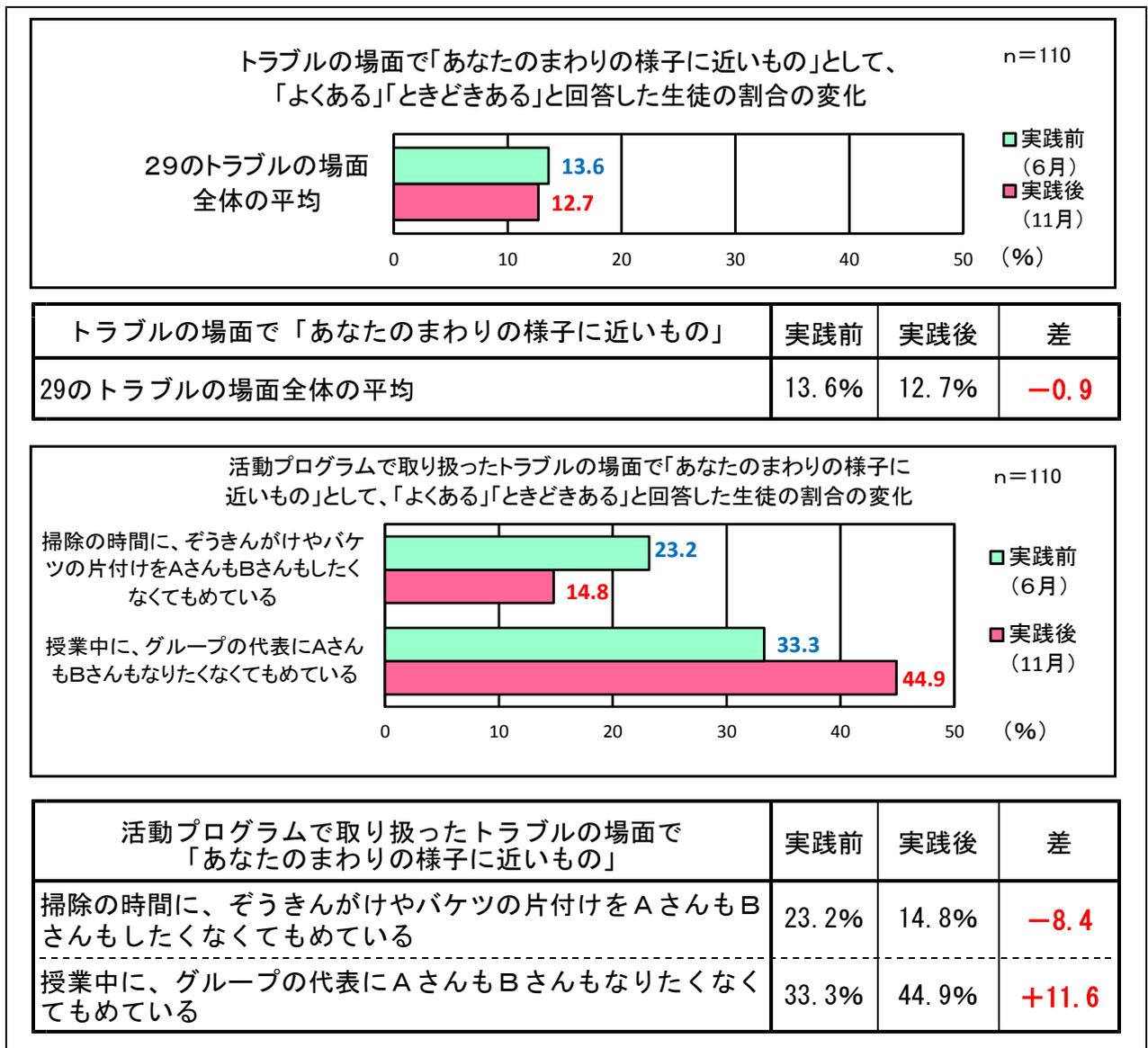
資料1 トラブルにならないような聞き方や話し方についての生徒の意識と行動の変化

- 「トラブルにならないような聞き方を心掛けていますか(意識)」と「トラブルにならないような聞き方をしていますか(行動)」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました(資料1)。
- 「トラブルにならないような話し方を心掛けていますか(意識)」と「トラブルにならないような話し方をしていますか(行動)」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました(資料1)。

○トラブルにならないような話し方のスキル学習においては、平成26年度に行った実態調査の結果、トラブルの頻度が高かった2場面を、トラブルになりそうな場面として設定しました。生徒にとって身近で具体的な場面での話し方について、モデリングを見たり、台詞づくりをして練習したりしたため、トラブルにならない話し方への意識が高まり実際に行動することができる生徒が増えたと考えます。また、実際のコミュニケーションの場面では、話すことと聴くことは切り離すことができないため、中学校においては、トラブルにならないような話し方と聴き方を同じ時間に取り扱いました。自分で考えたトラブルにならないような話し方の台詞をグループで練習する場面では、ワークシートを使って友達による評価とシェアリングができるようにしたことで、相手を意識したコミュニケーションについての理解を深めることにつながりました。評価の基準を明確にすることで、生徒自身がトラブルにならないような聴き方のスキルの必要性に気付くことができ、聴き方のスキル学習についても理解を深める効果があったと考えます。

**b 学級におけるトラブルの頻度の変化**

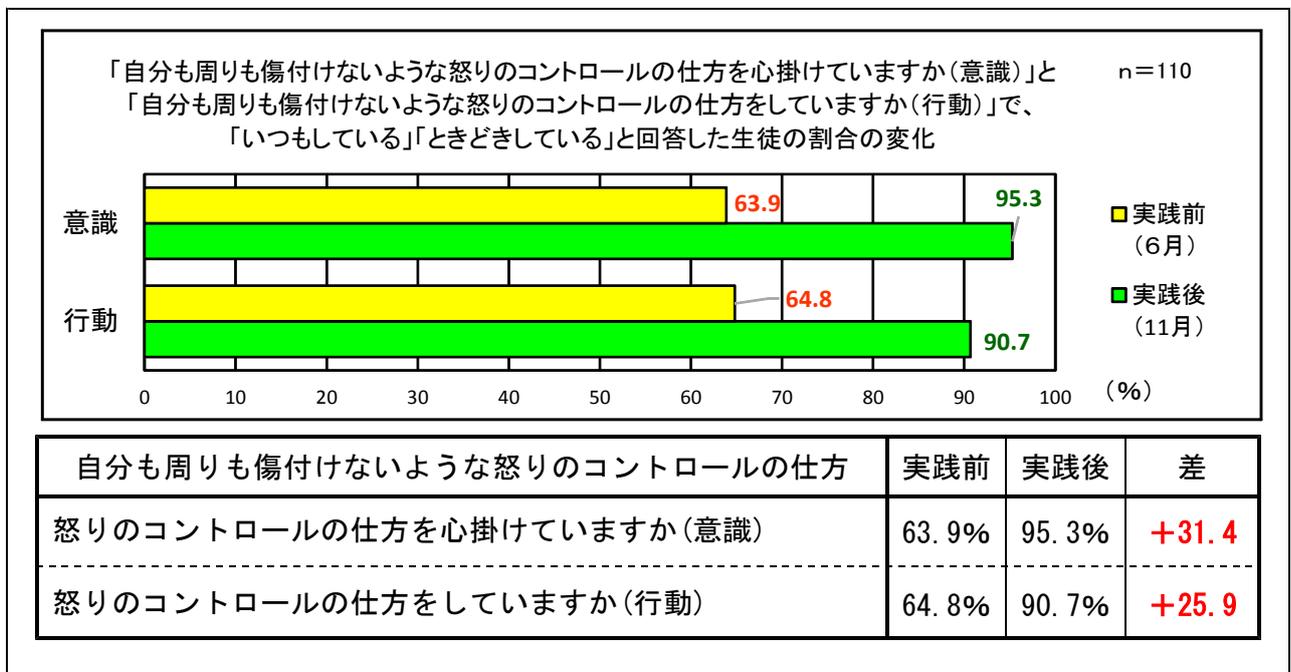
(「トラブルについてのアンケート」結果より)



資料2 トラブルの場面で「あなたのまわりの様子に近いもの」として、「よくある」「ときどきある」と回答した生徒の割合の変化

- 29のトラブルの場面で「あなたのまわりの様子に近いもの」として、「よくある」「ときどきある」と回答した生徒の割合が下がりました（前頁資料2）。
- 活動プログラムのトラブルにならないような話し方の授業で取り扱った「掃除の時間に、ぞうきんがけやバケツの片付けを…」の場面で、「よくある」「ときどきある」と答えている生徒の割合が下がりました（前頁資料2）。
- 活動プログラムのトラブルにならないような話し方の授業で取り扱った「授業中に、グループの代表に…」の場面で、「よくある」「ときどきある」と答えている生徒の割合が上がりました（前頁資料2）。
- 「授業中に、グループの代表に…」の場面は、トラブルにならないような話し方のモデリングの場面に設定しました。授業中の生徒は、これに似たようなしたくないことを押し付け合うタイプの場面がよくあるという反応であり、授業で取り上げたことで、トラブルとして認知する生徒が増えたと考えられます。  
 「掃除の時間に、ぞうきんがけやバケツの片付けを…」の場面は、モデリングの後に、したくないことを押し付け合うタイプのトラブルの1つとして提示し、トラブルにならないような話し方の台詞づくりと練習の場面に設定しました。1つの具体的な場面について、自分で台詞を考えて実際に練習で使うところまでを取り扱ったため、生徒がこの場面での話し方を意識するようになり同じトラブルが減ったと感じていることが考えられます。  
 このことから、具体的な場面を授業で取り上げることは、その場面をトラブルとして認知する生徒が増えると考えられます。一方で、具体的な場面における台詞づくりやその台詞を使った練習をすることは、トラブル未然防止に効果があると考えられます。

**c 自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方についての生徒の意識と行動の変化**  
 （「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より）

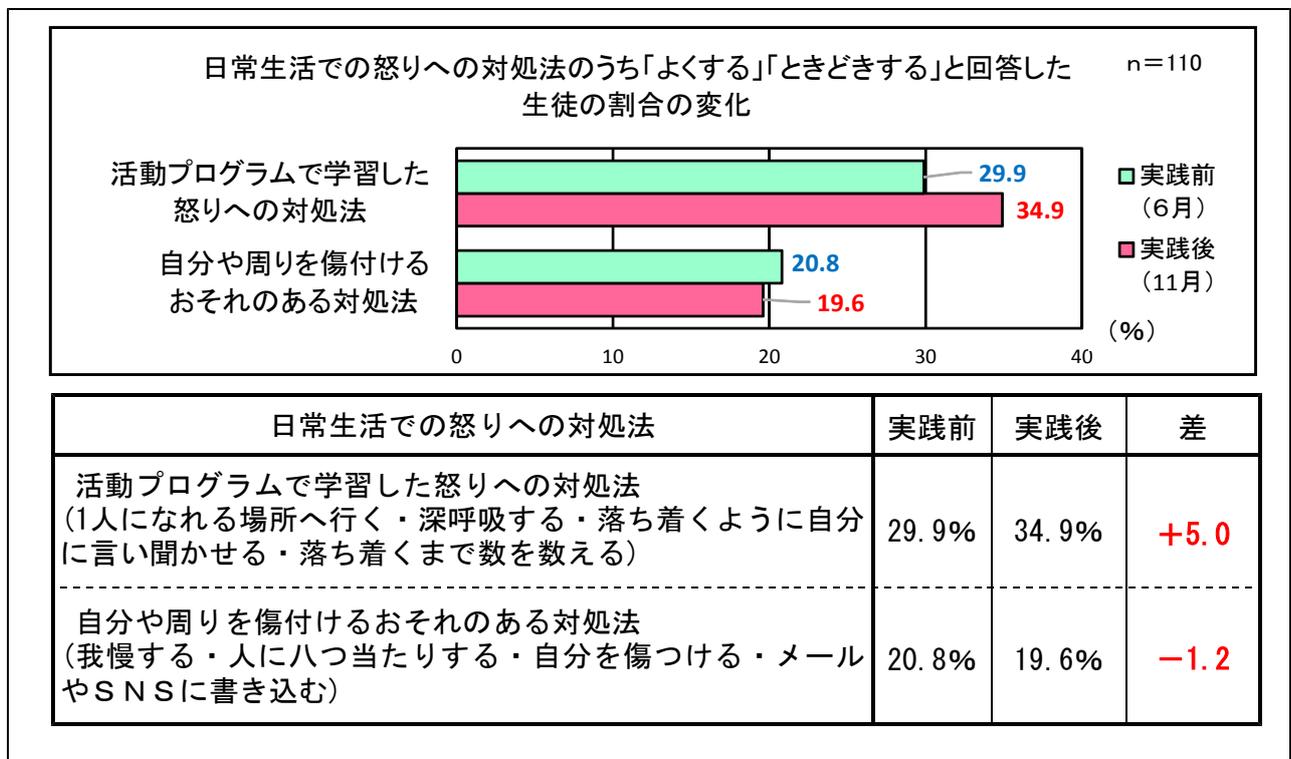


資料3 自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方についての生徒の意識と行動の変化

- 「自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方を心掛けていますか（意識）」と「自分も周りも傷付けないような怒りのコントロールの仕方をしていきますか（行動）」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました（前頁資料3）。
- 中学校においては、「怒りと上手に付き合おう」の学習を1時間掛けて丁寧に取り扱いました。怒りという感情をもつことが当たり前であるという前提で学習をしたことで、生徒は学習に取り組みやすかったと考えます。具体的な怒りのコントロールの仕方を学習した後に、自分が使ってみたい怒りのコントロールの仕方を考えるという活動をしたことで行動できるようになった生徒が増えたと考えます。

#### d 日常生活での生徒の怒りへの対処法の変化

（「トラブルについてのアンケート」結果より）

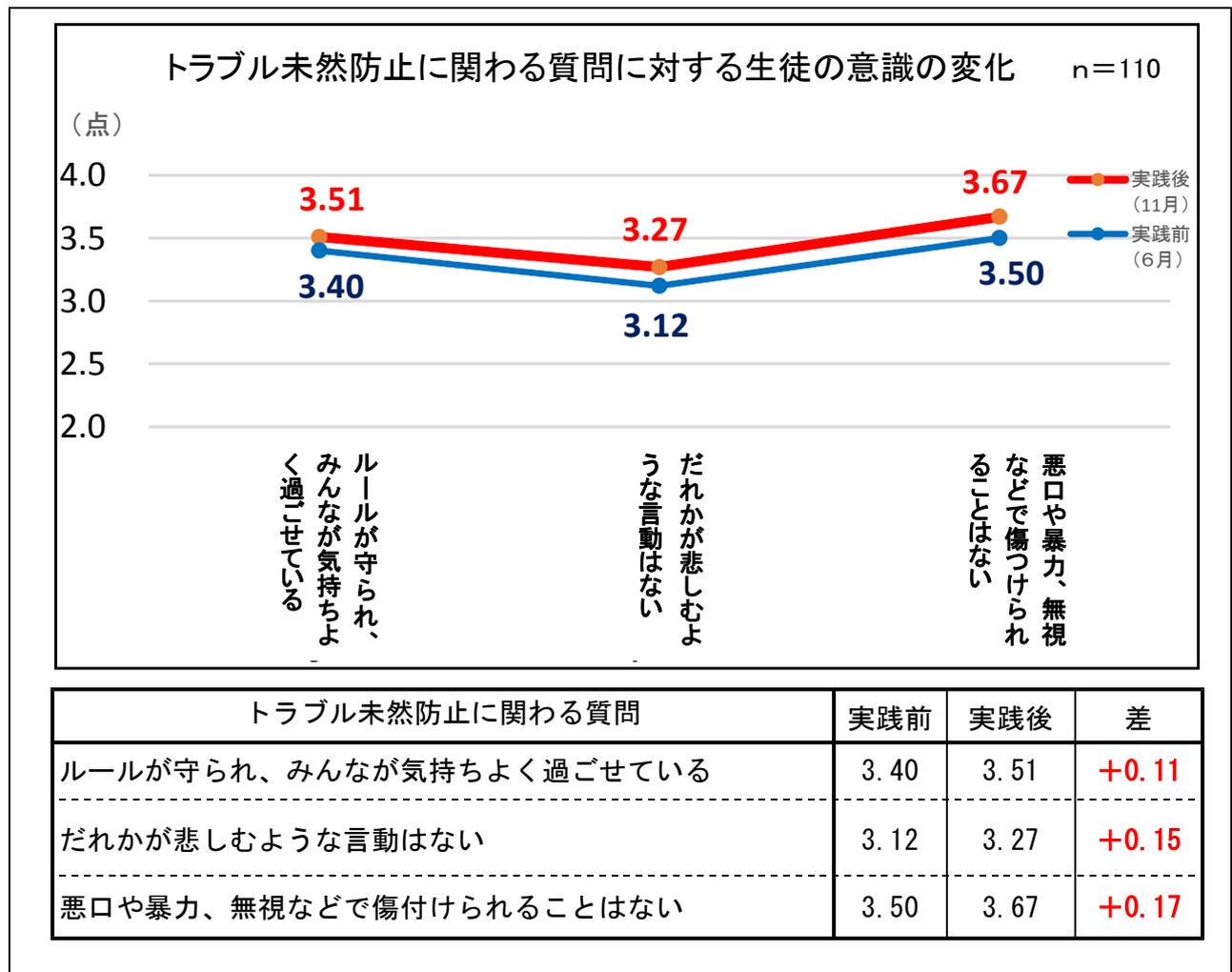


資料4 日常生活での怒りへの対処法のうち「よくする」「ときどきする」と回答した生徒の割合の変化

- 活動プログラムで学習した怒りへの対処法を「よくする」「ときどきする」と答えた生徒の割合は上がり、自分や周りを傷付けるおそれのある対処法を「よくする」「ときどきする」と答えた生徒の割合は下がりました（資料4）。
- 怒りへの対処法を複数学習することで、自分に合った怒りへの対処法を見付けることにつながり、自分や周りを傷付けるおそれのある対処法をする生徒が減少したのではないかと考えられます。しかし、自分や周りを傷付けるおそれのある対処法を「よくする」「ときどきする」という生徒は依然として20%近くいることから、継続して取り扱っていく必要があると考えます。

## e トラブル未然防止に関わる質問に対する生徒の意識と行動の変化

(「がばいシート」結果より)



資料5 トラブル未然防止に関わる質問に対する生徒の意識の変化

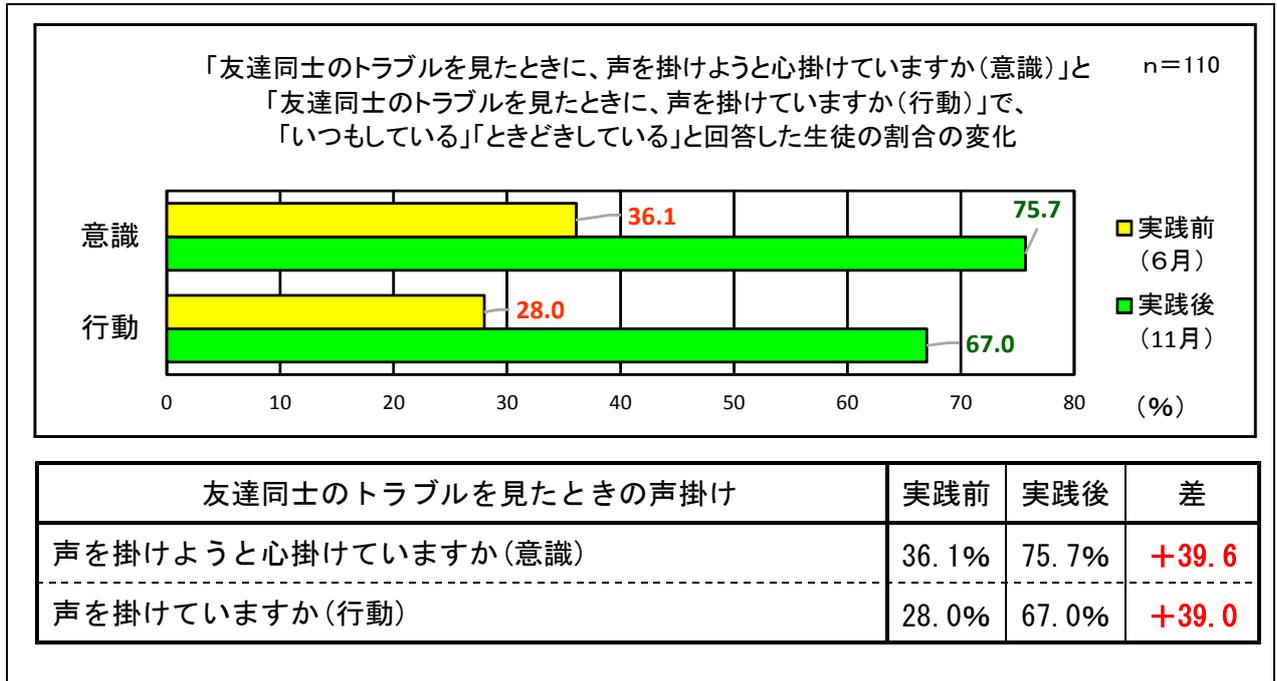
- トラブル未然防止に関する3つの全ての質問で、ポイントが上がりました(資料5)。
- このことから、活動プログラムで学習したトラブル未然防止のスキル学習が、より良い学級の雰囲気や友達との関係づくりに効果があったと考えます。



【検証の視点Ⅱ】トラブル解決に効果があったか

a 友達同士のトラブルを見たときの声掛けについての生徒の意識と行動の変化

(「ピア・メディエーションに関する活動プログラムの学習についてのアンケート」結果より)



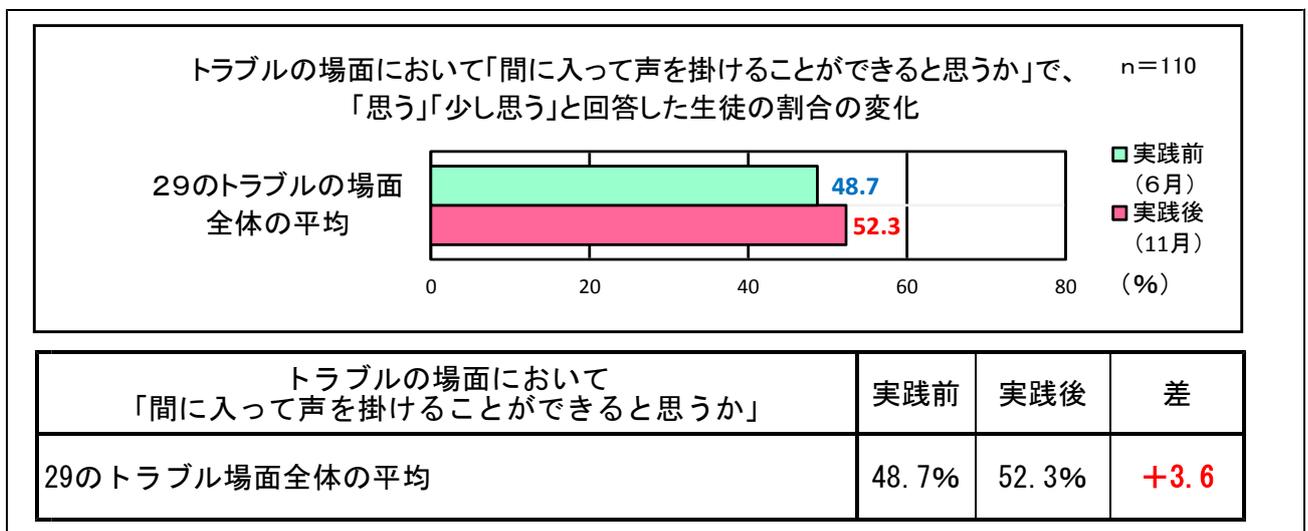
資料8 友達同士のトラブルを見たときの声掛けについての生徒の意識と行動の変化

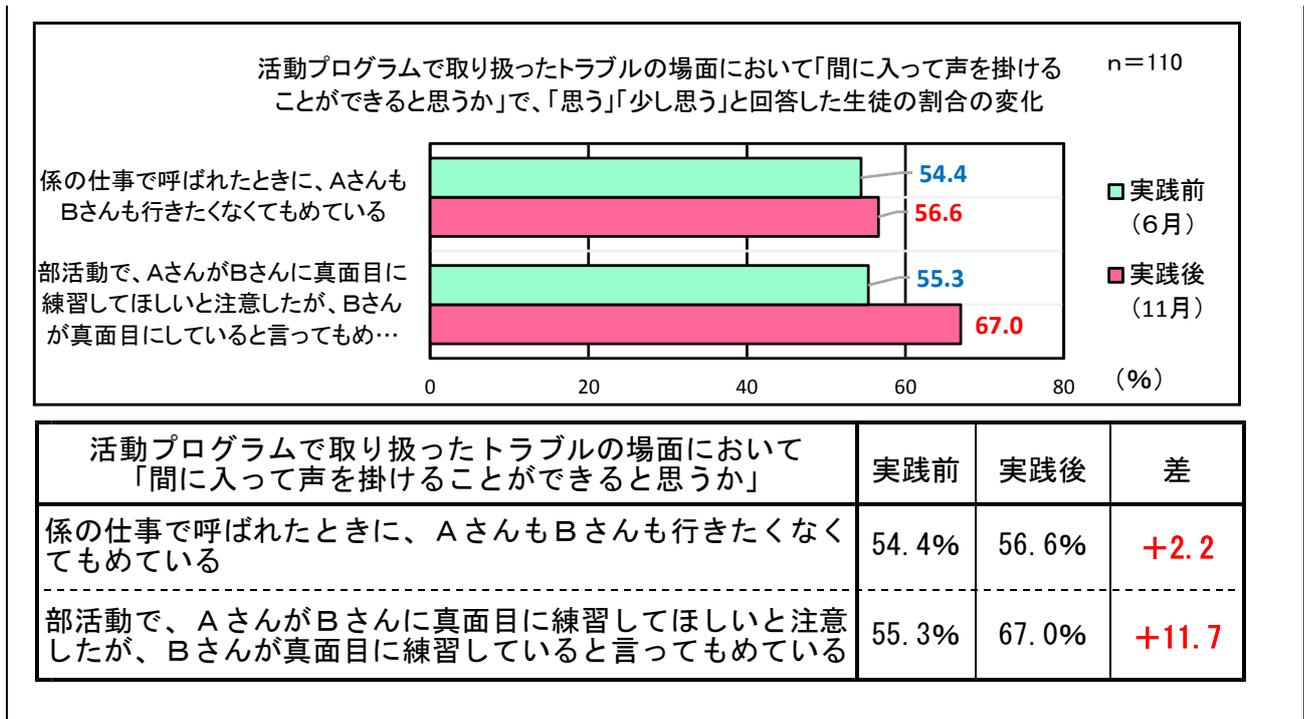
○「友達同士のトラブルを見たときに、声を掛けようと思っかけていますか(意識)」と「友達同士のトラブルを見たときに、声を掛けていますか(行動)」の質問に対して、「いつもしている」「ときどきしている」と回答した生徒の割合が上がりました(資料8)。

○もめている当事者の間に入って声を掛ける方法を具体的に学習することで、声を掛けることに対する意識が高まり、行動に移す生徒が増えたと考えます。

b 友達同士のトラブルの場面での声掛けの意識の変化

(「トラブルについてのアンケート」結果より)



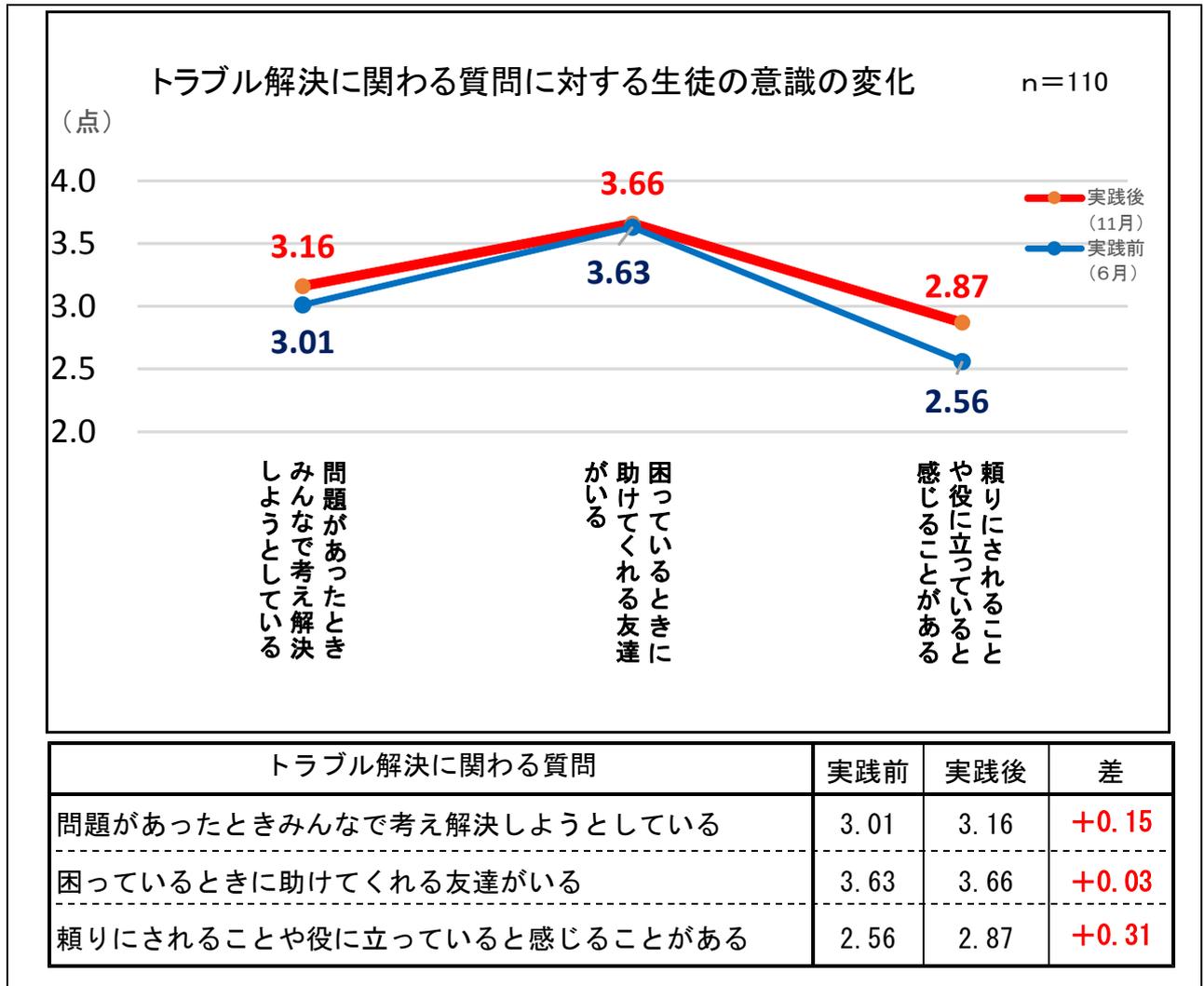


資料9 トラブルの場面において「間に入って声を掛けることができると思うか」で、「思う」「少し思う」と回答した生徒の割合の変化

- 29のトラブルの場面において「間に入って声を掛けることができると思うか」で、「思う」「少し思う」と回答した生徒の割合は、上がりました（資料9）。
- 活動プログラムで取り扱ったトラブルの場面については、「間に入って声を掛けることができると思うか」で、「思う」「少し思う」と回答した生徒の割合は、上がりました。特に、「部活動で、AさんがBさんに真面目に・・・」の場面では、11.7ポイント上がりました（資料9）。
- トラブル解決の学習において、生徒は「部活動で、AさんとBさんが真面目に・・・」の場面のトラブル解決の動画を視聴し、トラブル解決のポイントを考え、更にポイントの入った動画でトラブル解決のポイントを確認しました。このように、繰り返し動画を使って考えることで、ポイントの理解が深まり、声掛けの意識の向上に効果があったと考えます。

c トラブル解決に関わる質問に対する生徒の意識の変化

(「がばいシート」結果より)



資料10 トラブル解決に関わる質問に対する生徒の意識の変化

- トラブルの解決に関わる全ての質問で数値が上がりました (資料10)。
- このことから、活動プログラムで学習したトラブル解決のスキル学習が、より良い学級の雰囲気や友達との関係づくり及び自己存在感の高まりに効果があったと考えます。

d 活動プログラム実践後の生徒と教師の感想

中学2年生

学習前はトラブルが起きているでも声をかけようとしていませんでした。学習後にはトラブルの解決をする方法が分かったので以前より声かけが出来るようになりました。相手のことを考え思いあふれるクラスにしたいと思いました。

資料11 活動プログラム実践後の生徒の感想

- ・学校に限らず、社会に出てからもトラブルはつきものだと思う。トラブル解決のスキルの学習は学校生活だけでなく卒業した後も活用できるスキルであるため、中学校でポイントを押さえて学習することは有効であると考えます。
- ・これまで、自分自身がトラブルに巻き込まれることを恐れて、友達同士がもめていても、為す術もなく見ているしかなかった生徒たちであり、友達同士のトラブルについて公に話題にすることを避けてきていた生徒たちである。それだけに、今回、具体的なトラブルの場면을授業で取り上げて、このように声を掛ければよいと理解して台詞づくりをし、全員が実際に練習してみたことは、「声を掛けることはできそうにない」と感じていた生徒にとって大きな経験になったと思う。今後、そういった場面に出会ったとき、「どうしたの」と声を掛けようという意識が働いてくれることを期待する。

#### 資料12 活動プログラム実践後の教師の感想

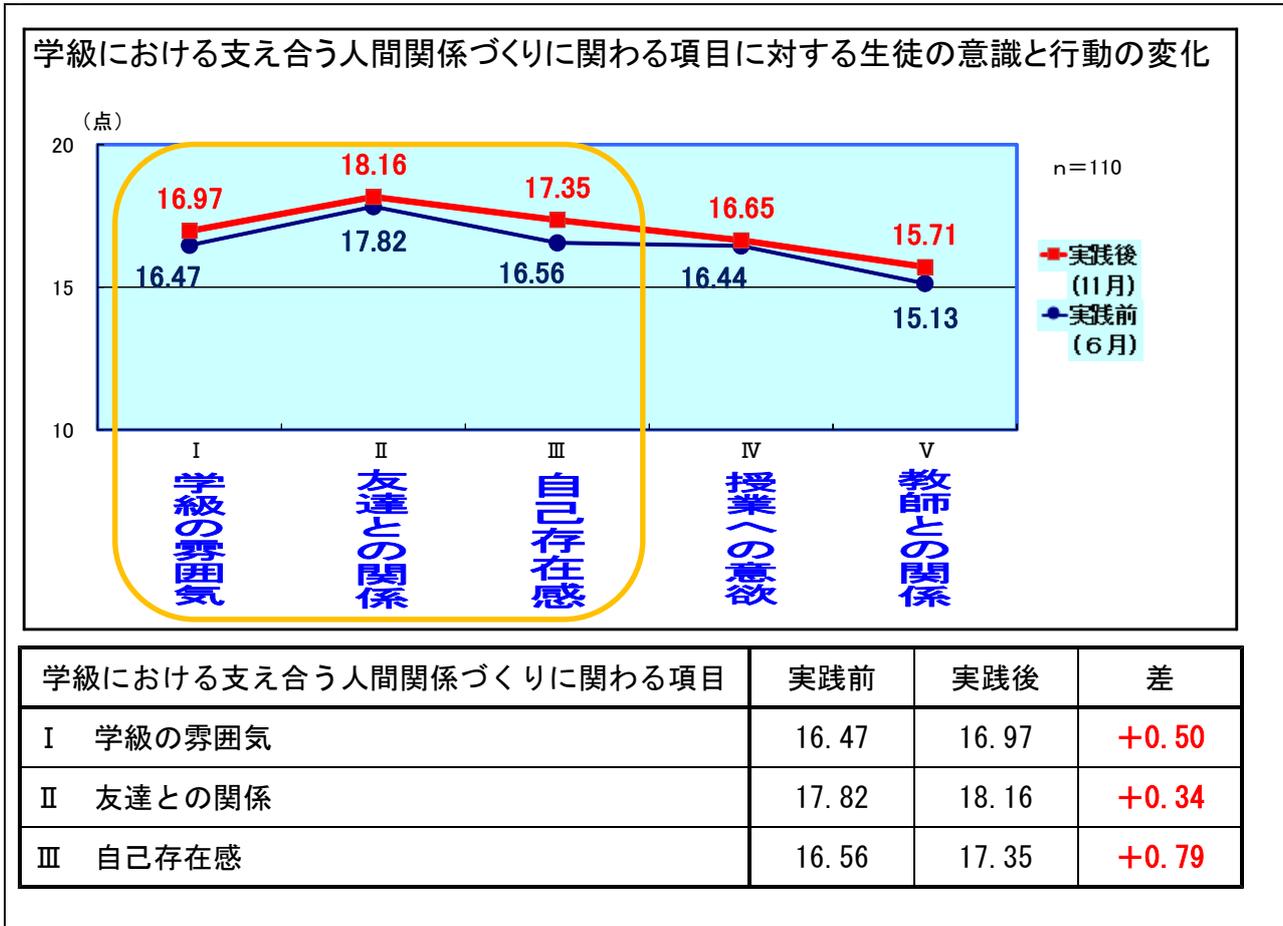
- 活動プログラム実践後の生徒の感想には、トラブル解決のポイントを学習することで、以前よりも声を掛けることができるようになったという記述がありました（前頁資料11）。
- 活動プログラムを実践した教師の感想には、トラブル解決のポイントをスキルとして身に付けさせることが、今後の生活の中で必要であるという記述がありました（資料12）。

以上のことから、トラブル解決のスキル学習は、より良い学級の雰囲気や友達との関係づくり及び自己存在感を高めるために有効であり、トラブル解決に効果があったと考えられます。また、トラブル解決の効果を更に高めていくために、学習した内容をトラブルの場面だけではなく日常の場面でも継続して取り扱っていく必要があると考えます。

## 【検証の視点Ⅲ】学級における支え合う人間関係づくりに効果があったか

## a 学級の雰囲気、友達との関係、自己存在感についての生徒の意識と行動の変化

(「がばいシート」結果より)



資料13 学級における支え合う人間関係づくりに関わる項目に対する生徒の意識と行動の変化

○活動プログラムの実践前後の「がばいシート」の結果（項目別）を比較すると、着目した3つの項目の数値は全て上がりました。特に、「学級の雰囲気」と「自己存在感」の項目においては、0.5ポイント以上数値が上がりました（資料13）。活動プログラムの実践を通して、生徒にとって居心地の良い学級になり、学級における自分を価値ある存在であると感じていることが分かりました。

○このことから、この活動プログラムが生徒の支え合う人間関係を築くために有効であると考えます。